台大日本語文研究第 37 期
2019 年 6 月，頁 63-94
2019-03-28 收稿，2019-05-28 通過刊登
DOI: 10.6183/NTUJP. 201906_(37).0004

日影丈吉的殖民地台灣經驗

——推理小說《内部の真実》中的台灣意象

陳萱*

摘要

日本知名推理作家日影丈吉（1908-1991）雖然在台灣知名度並不高，然而在其漫長的寫作生涯中，他卻持續不斷地書寫以台灣為舞台背景的推理小說。1944 年 7 月，日影接受國家的徵召入伍陸軍，並跟隨軍隊前往當時為日本殖民地的台灣。及至 1946 年 3 月在台灣迎接日本戰敗的消息、跟隨軍隊回日本為止，日影以先遣部隊隊員的身分，隻身踏遍台灣各處，實地進行風俗民情的勘察，並與各個階層的台灣民眾有深入接觸、交流的經驗。歸國後，日影根據在台實地踏察經驗及見聞，寫出一連串以台灣為舞台的「台灣物語」的推理小說。

本文以日影最早的台灣物語作品、創作於 1959 年的《内部の真実》為研究文本，探討日影如何根據在台灣的真實經驗與見聞，衍生、想像並虛構台灣；並以此為舞台，開展出發生於日本憲兵隊軍官與台灣人之間的殺人事件。透過此文本分析過程，本論文將解析日影如何觀察、定義殖民地台灣，以及，如何藉由書寫日本人與台灣人之間的愛恨情仇，重現並詮釋殖民者日本與被殖民者台灣之間的關係。

關鍵詞：日影丈吉、殖民地台灣經驗、推理小說、日本／男性、台灣／女性

* 致理科技大學應用日語系助理教授

臺灣大學學術期刊資料庫

Hikage Jokichi's Taiwan Colonial Experience: Taiwan Imagery in the Mystery Novel "Inner's True ssence"

CHEN, Shuan*

Abstract

Although Hikage Jokichi (1908-1991), a well-known mystery novel writer in Japan, has not received much attention in Taiwan, he kept having his novels published by situating Taiwan as a story background in his writer's career. In July 1944, Hikage served his military stint in an army, following the army to Taiwan, which was then colonized by the Japanese government. Hikage, a member of the advance troops, travelled throughout Taiwan, conducting on-the-spot investigations with quite close contacts with Taiwanese people from all walks of life. After the Japanese defeat in March 1946, he followed the army back to Japan. Having returned to Japan, based on his previous travel experiences and understanding towards Taiwanese's culture, he wrote a series of mystery novels relevant to stories in Taiwan, situating Taiwan as the background.

This study is an attempt to investigate Hikage's earliest series of stories in Taiwan, "Inner's True Essence" written in 1959. Analyses on his work will be conducted in exploration of how Hikage derived and imagined Taiwan from his authentic experiences and understanding towards Taiwan. Situating Taiwan as the story background, Hikage's book depicted the murder between officers of the Japanese Gendarmerie and Taiwanese people. Text analyses will be performed to analyze how Hikage observed and defined the colonial Taiwan as well as how to

* Assistant Professor, Department of Applied Japanese, Chihlee University of Technology

臺灣大學學術期刊資料庫

reproduce and interpret the relationship between the colonists and the colonizedby elaborating their love and hatred.

Key words: Hikage Jokichi, the colonial Taiwan experience,
mystery novel, Japanese / male, Taiwan / female

臺灣大學學術期刊資料庫

日影丈吉の植民地台湾経験
——推理小説『内部の真実』における台湾表象

陳萱*

要旨

台湾ではそれほど知られていない、推理小説作家日影丈吉（1908-1991）は、生涯に渡って台湾を舞台とした作品を創作し続けた。1944年7月に、国の召集に応じて陸軍に入隊すると当時は日本の植民地であった台湾へと赴くことになる。そして終戦後の1946年3月に台湾から復員するまで、一人で台湾の隅々を歩きまわって現地の風俗習慣について調査をした。その間、台湾の人々と深く接触し、交流をしていたという。帰国後、台湾での実際の経験や見聞に基づいて台湾を舞台とした「台湾もの」と呼ばれる一連の推理小説を書きあげることになるのである。

本論文は、日影の最初の「台湾もの」作品で、1959年に創作された『内部の真実』をテキストとして取り上げ、台湾での実際の経験と見聞に基づいて、いかにそれを派生させ、台湾について想像し、創作したのかを論じる。さらに、この小説の中で、日本の憲兵隊士官と台湾人の間に起こった殺人事件をどのように展開させたのかを分析する。このようにテキストを分析することによって、本論文は、日影がどのように植民地台湾を観察し、定義しているのかを解析するとともに、日本人と台湾人との間の愛憎をどのように描き、そして、いかに日本と植民地台湾の関係を再現し解釈したかについて分析を加える。

* 致理科技大学応用日本語学科助理教授

臺灣大學學術期刊資料庫

キーワード：日影丈吉、植民地台湾での経験、推理小説、
日本人／男性、台湾／女性

臺灣大學學術期刊資料庫

日影丈吉の植民地台湾経験
―推理小説『内部の真実』における台湾表象

陳萱

一、はじめに

生涯に渡って台湾を舞台とした作品を創作し続けたにもかかわらず、台湾ではそれほど知られていない推理小説作家日影丈吉は、日本では「異色のミステリ作家として知られ、戦後最高の幻想小説の書き手であった」[1]と賞賛されている。また、台湾文学の研究者である垂水千恵は「日影というのは誰にとっても、その作品との出会いの僥倖をしみじみと感じさせてくれる作家であるとは思うけれど、それにしても一九四五年前後というのはまさに台湾文学における空白期であり、その空白を埋める破片を提供してくれるのが日影丈吉であったことの幸運を、一台湾文学研究者として感じずにいられない」[2]と、台湾文学におけるその作品の重要性を述べている。

日影は、日本が台湾を植民地として統治している間、軍人として台湾に派遣されて、そこで二年近く生活していた。台湾での滞在時間こそは長くなかったが、その体験は濃厚で徹底したもので、後に彼の推理小説の創作の大事な糧となり、彼がこの世を去るまでに、台湾を舞台にして創作したり、台湾の物事について語ったりして、作品の中に重要な要素として取り入れ続けていた。言い換えれば、台湾体験は日影にとっては忘れられない、生涯を通しての重要な経験の一つであり、その創作を研究するにおいて欠かせない要素の一つなのである。

そして、日影の台湾ものについての研究論文は多いとは言えない

---

1 出版社の国書刊行会のページ:「http://www.kokusho.co.jp/np/result.html?ser_id=104」による監修の種村季弘の言葉である。

2 垂水千恵(2002)「日影丈吉の台湾」、『日影丈吉全集』「月報」2、国書刊行会、2頁。

臺灣大學學術期刊資料庫

ながらも、発表され続けている。まず指摘できるのは、台湾の研究者である姚巧梅が四篇の論文を書き、日影と台湾との関連および日影の台湾ものの作品である「崩壊」、「眠床鬼」について、そのメタファーを論じている[3]。また、文化人類学者である紙村徹が「台南蘭砦址にまつわる対談における位相の差異―佐藤春夫と日影丈吉の見た台湾の闇―」のなかで、佐藤春夫と日影丈吉の台湾に関する作品のそれぞれのあらすじ、場面の設定や構造を比較、分析している[4]。さらに、紙村徹は日影の台湾ものから三つの短編を取り上げて、その中に日影の描いた「台湾の闇」について、「日影丈吉の描いた台湾の「闇の奥」―日影丈吉はいかにして異郷台湾と出会ったのか―」という論文を書いた[5]。そして、池田浩士は『[海外進出文学] 論・序説』の序章で、日影が華麗島台湾を舞台にした作品を紹介し、論じている[6]。また、川村湊も『コレクション戦争と文学 18　帝国日本と台湾・南方』という本の解説で日影丈吉と台湾との関わりに触れている[7]。

前述した先行研究による日影の作品における台湾の持つ意味や台湾という異郷が推理小説の構成にどう活用されたかという論法とは違い、この論文では『内部の真実』という作品を取り上げて、日影が植民地という環境に制限されながら懸命に生きようとする日本の下級軍人や、植民地統治を受け、そこを故郷として生活している台湾人をいかに描いたかに焦点を絞って検証してみたい。その検証を通して、日影は自らの台湾体験をどのように作品にしたか、また戦後の日本人読者にどのような植民地台湾像を提示し、台湾に生きる

3 姚巧梅（2005）「「日影丈吉と台湾」ノート」、（2006）「日影丈吉の「崩壊」、（2006)「眠床というメタファー――日影丈吉の「眠床鬼」を中心に」、(2007)「眠床鬼」と台湾」を参照されたい。

4 紙村徹(2009)「台南蘭砦址にまつわる対談における位相の差異―佐藤春夫と日影丈吉の見た台湾の闇―」を参照されたい。

5 紙村徹(2010)「日影丈吉の描いた台湾の「闇の奥」―日影丈吉はいかにして異郷台湾と出会ったのか―」を参照されたい。

6 池田浩士(1997)『[海外進出文学] 論・序説』を参照されたい。

7 川村湊(2012)「解説　滄海に滅ぶ―台湾・南方の戦い」『コレクション戦争と文学 18　帝国日本と台湾・南方』を参照されたい。

臺灣人文學研究資料庫

日本人と台湾人を表象したかを分析する。まず、日影丈吉の作家としての歩みから、植民地台湾との関わりまでを見ていきたい。

二、日影丈吉の台湾ものについて

（一）日影丈吉と台湾との関わり

日影丈吉が日本の文壇に登場するきっかけは、1949 年に『宝石』という推理小説雑誌の百万円懸賞の短編部門に、「かむなぎうた」という作品で応募し、二席として入選したことである。その時、はじめて日影丈吉というペンネームを使い、作家として歩み始めた。しかし、当時すでに 40 歳を超えた中年の新人作家であった日影が、文壇で華々しく活躍したとは決して言えないだろう。入選後の翌年、受賞後の第一作に当たる「木笛を吹く馬」を『宝石』誌に発表してから、数年間に発表した作品は極めて少なかった。

日影丈吉こと本名片岡十一は、1908 年 6 月に東京市深川区に生まれ、病弱な末っ子として大事に育てられた。1924 年、16 歳の年からアテネ・フランセに通いながら、川端画学校で洋画を学んだ。それ以降、昭和初期までフランス語、ラテン語、ギリシャ語を学んで、フランス語とフランス文学などの素養があったことは、日影が作家の道を歩むようになるまでの生計を助けたのみならず、彼の創作の下地にもなった[8]。1930 年 22 歳で、後に有名な作家となった坂口安吾らとアテネ・フランセで同人誌『言葉』を創刊した。その頃から、日影は推理小説「硝子の章」（1930）の第一稿[9]、「さんどりよんの

[8] 日影はガストン・ルルーの『黄色い部屋の秘密』(1956)、『黒衣夫人の香り』(1957)、ジョルジュ・シムノンの『メグレと老婦人』(1956)、ボアロー・ナルスジャックの『死者の中から』(1956)、シムノンの『娼婦の時』(1961)、レウヴァン『そそっかしい暗殺者』(1973)、ナルスジャックの『ちゃっかり女』(1975)、ルルーの『オペラ座の怪人』(1989) など多数の作品を翻訳出版したことがあり、フランス語の推理小説を愛読していたことが窺える。また、日影丈吉全集の解説によると、彼は自分自身によって台湾ものの『内部の真実』をフランス語に翻訳して出版しようとした。このことが、日影のこの作品に対する愛着の深さも窺わせている。『日影丈吉全集・別巻』の「月報」9、1055 頁。

[9] 「硝子の章」は 1944 年 5 月に完成された。

臺灣大學學術期刊資料庫

唖」（1931）、「蜃気楼」（1931）、「沙漠の神」（1932）の第一稿を執筆したり、発表したりしていった。

一方、1933 年の 25 歳頃から、レストランやホテルのコックに、料理書を教科書に使ってフランス語を教えるようになった。1935 年麹町区で「料理文化アカデミー・仏語部」を開き、後に帝国ホテルの料理長となる村上信夫や、ホテルオークラの小野正吉、横浜ニューグランドの入江茂忠など、日本においてフランス料理を切り開いて支えた人々に、フランス料理の作り方やフランス語を手とり足とり教えた[10]。そのため、コンクールに入選してからの数年間、フランス料理のコックへの講習指導に忙しく、入選作「かむなぎうた」は推理小説の大家である江戸川乱歩に「殆ど完璧の作品」[11]と激賞されたにもかかわらず、しばらくの間創作に時間を割けず、活字になった作品の数は僅かしかなかった。

他方、1950 年から日本の推理文壇で本格派と文学派との対立が激しくなり、それと共にその文学活動も盛んになっていった。『探偵倶楽部』という雑誌が 1950 年に創刊され、同時代の多くの作家が作品を寄せたのを意識したのか、日影も 1954 年頃からその雑誌に多くの作品を投稿し、掲載されるようになった。1955 年に『宝石』に掲載された「狐の鶏」が推理文壇で高い評価を得、翌 1956 年に第九回日本探偵作家クラブ賞を授与されて、彼は推理小説家としての実力及び地位を確実なものにした。ところが、1958 年に長編小説『見なれぬ顔』を発表したものの、その評判は芳ばしくなかった。

翌 1959 年、「台湾もの」と言われる台湾を舞台にする一連の作品の第一作として『内部の真実』[12]が発表され、それは文壇に篤く肯定

[10] 『日影丈吉全集・別巻』の「月報」9 にある「日影丈吉年譜」を参考にした。
[11] 日影丈吉『日影丈吉全集』第 1 集の「月報」1 にある横山茂雄の「解説」、国書刊行会、2002 年、608 頁。
[12] ただし、横山茂雄の解説に拠ると、日影の最初の長編作品は前述した『見なれぬ顔』ではなく、『内部の真実』であった。「刊行の時間的順序からいえば『内部の真実』は第三番の長編にあたるが、作家自身は「ぼくの処女長編です。台湾の生活をもとにして書いたもので」と述べている」のである。日影丈吉『日影丈吉全集』第 1 集の「月報」1、612 頁。

された。そのことによって、日影丈吉が短編小説だけではなく、長編の作品も著述できることが証明された形になった。その後、『内部の真実』、『華麗島志奇』、『応家の人々』などの台湾を舞台にした作品のほか、『恐怖博物誌』、『一丁倫敦殺人事件』、『泥汽車』など数々の名作を残している。また、第九回探偵作家クラブ賞（1956）、第十八回泉鏡花文学賞（1990）などを受賞するほど、推理小説の作家として日本の文壇に高く評価された。

ところで、日影と台湾とのつながりは、1944 年 7 月から 1946 年 3 月まで陸軍近衛師団捜索連隊の下士官として台湾に一年半余り滞在したことによってできたものである。彼は台湾に滞在していた間、部隊移動の先遣隊として、一人で台湾を隅々まで歩き回り、情報収集をしていた。そのため、台湾社会に深く入り込み、台湾の各階層の人々と接触することができた。

かつて台湾で暮らした日々について、後に日影は次のように語っている。

> 戦争中、三年（ママ）ばかり台湾にいた。そのあいだ、そこの自然にも人間にも、一瞬の停滞もなく流動する実体という感じを持った。そんなにまざまざと時の激しい流れを体験した記憶は、ほかにない。死の危機の絶えず挑発される時間でもあったが、そこに生きる自分を含め、すべてを見ることで私の心が、そんなにものんびりと静かにうつろだった時もまた、なかった。いや、死とか愛とかの問題を口にする必要もないくらい。だから台湾は私にはただの思い出の土地ではないようである。[13]

というように、戦時中すべてが激しく変化した環境で、生死の境を彷徨ったほど、心身共に限界を強いられた体験をしたにも関わらず、日影はその心苦しく、醜いものすべてを見たことを通して、真に心がくつろいで余裕のあることがいかに大切であるか理解できたと述べている。そのような美醜、善悪を見せてくれた台湾は日影に

[13] 日影丈吉（1975）『華麗島志奇』序文、牧神社。

臺灣大學學術期刊資料庫

とって、思い出の土地というレベルを遥かに超えて、創作の源泉となり、また人生のかけがえのない一部分となったと思われる。

その体験を基にして、日影は1952年に「天仙宮の審判日」という台湾を舞台にした短編小説を発表、1959年に『内部の真実』を刊行した。そして、1961年に『応家の人々』が公刊されたことに加えて、1975年に短編小説集『華麗島志奇』が出版された。そのほか、雑誌に発表された「金果記」、「李将軍」、「怪談・ひとり者の卵」、「崩壊」、「吸血鬼」、「魂魄記」などの短編小説が数多くある。また、歴史、地理、風俗習慣や、彼が台湾で見聞した物事についてのエッセイも多く書かれている[14]。さらに、1990年に雑誌『創元推理』に、「黄鵬楼」という連載を始めた。ただし、翌1991年に日影が心不全で亡くなったため、これは未完の作品となってしまった。日本に帰国してから40年以上の長い年月が流れたにも関わらず、日影は台湾に対する思いを抱き続け、さらにその思いを具体化して台湾ものと言われる数々の作品に仕上げたと言えよう。次は『内部の真実』について検討していきたい。

（二）『内部の真実』の内容および評価

『内部の真実』は1959年に東都書房から出版されて、日影が台湾を舞台として書いた最初の長編小説である。また、彼が本格的な推理小説家として認められた作品でもあり、出版された当時から、多くの人から絶賛されている。

この作品は、植民地時代に台湾の「桃源」という地方に駐在した日本人士官の死亡事件について描いたものである。「第一部　玉蘭姉妹の庭」と「第二部　個の権利」という二つの部分によって構成されており、それぞれに「有義園事件記録　昭和二十年三月・台北」と「有義園事件補記　昭和二十年十月・台北」という副題が付いている。つまり、日影の台湾滞在の期間とほぼ重なり、台湾が日本の植民地統治から解放される直前の1945年3月から、中国に接収さ

[14] 日影丈吉の台湾ものについての紹介は、姚巧梅（2005）「「日影丈吉と台湾」ノート」に参照されたい。

臺灣大學學術期刊資料庫

れた1945年10月までの間に起きた事件が記録されているのである。第一部は、事件の調査を担当した憲兵隊の小高軍曹が事件の発生や調査などを詳しく記録した手記である。第二部は、小高軍曹が死亡したあと、同じ憲兵隊の津路軍医が引き続き調査をして、その内容を記録したもので、第一部と比べて内容は極めて短く、事件の解明を補足したようなものである。

1944年5月中旬のある初夏の夜、台湾人である葦田清太郎の桃源にある家の前庭で、新竹にある憲兵大隊の桃源分遣隊に所属する日本人の曹長・苫が拳銃に打たれて死亡した。その横には意識不明になった名倉一等兵が倒れていた。そして、小高の調査記録によって、葦田家が日頃親切に歓待してくれるため、兵士たちは頻繁にその家に出入りしていること、苫、名倉、および小高自身がその家の娘である恒子を慕っていたことや、三人には互いに確執があったことなどが暴かれた。また、物語のもう一つのプロットとして、小高、恒子及び葦田家の養女である瑶琴の間にある恋心も次第に明らかになっていった。しかし、真相が解明される前に、調査の担当者である小高は逆に容疑者として拘束されてしまい、その間、空襲で被爆し亡くなってしまった。

そして、第二部では、調査をする津路軍医と憲兵隊の最高長官である大手大尉、勝永伍長の三人の会話を通して、殺人事件の謎が解明されている。ただし、苫も小高もすでに死亡したため、大手大尉はその真相を明かさずに、本件を棄却すると決め、「真実とは何か、だ。本件の場合も、一人の男が犯した致命的なヘマの理由は到底わかりそうもない。小高が生命をかけて護ろうとしたのは、何だったろうかね？」[15]と呟いたところで、小説は幕を閉じる。

このような内容を描いた『内部の真実』が公刊された当時、推理小説の大家である江戸川乱歩は「この作は本格ものだ。複雑なプロ

[15] 日影丈吉（1978）『内部の真実』社会思想社、217頁。本論文における『内部の真実』の引用はすべてこの版によるものであるため、以下の引用は引用文の後に頁数のみを記すことにする。

臺灣大學圖書館典藏資料庫

ットがよく考えてある。しかも、単なる謎ときではなく、それ以上に何ものかをつけ加えようとした努力がよくわかる作品」[16]だと高く評価している。その評価は、推理小説としての内容に対するものだけではなく、日影が努めて内地の日本人にとって認識の少ない台湾の風習、人情について、新鮮で異国的な雰囲気を醸しながらも、無理なく小説のプロットの一部として書き込んだことが関係していると思われる。

また、推理小説ではあるが、小高が命をかけて恒子を護ろうとした内容も重要な部分を構成しているためか、この作品はよく恋愛小説でもあると言われている。例えば、作家の草森紳一が作品の付録「白い玉蘭＝悪魔の紋章」で、「私は、この『内部の真実』を恋愛小説だとも言った」[17]と述べている。そして、国書刊行会は『日影丈吉全集』を出版した際、文学者で評論家、また全集の監修者である種村季弘の「「第一級の恋愛小説」とも評される」[18]という言葉を用いて宣伝している。したがって、日影は謎を内包する推理小説という形式を用い、様々な感情が絡んでいる恋愛関係を描いたことで、彼が直面したことのある植民地における人間関係の複雑さを表そうとしたのではないかと思われる。次にその植民地社会の複雑な人間関係を、作品中の男女の構図を通して論じていきたい。

三、『内部の真実』における日本／台湾の構図

（一）植民地にいる日本人男性

1、日本人男性での階層構造

「恋愛小説」と言われたことにも象徴されるように、『内部の真実』は男女の複雑で込み入った心理が巧みに描写されている。そして、指摘しなければならないのは、日影は意識的にそれを日本人男

16 日影丈吉（2002）『日影丈吉全集』第 1 集の「月報」1、国書刊行会、614 頁。
17 日影丈吉『内部の真実』、236 頁。
18 出版社のページ「http://www.kokusho.co.jp/np/isbn/9784336044112/」によるものである。

臺灣大學學術期刊資料庫

性と台湾人女性という図式で描いている[19]。それは単に台湾人女性である恒子を愛慕するのが日本軍人だということを意味しているだけではない。また、作品中に出てくる日本人が全員男性であるのに対して、発言できた台湾人は女性のみだということにも通じている。また、詳しく描写されてはいないが、小高によって簡潔に表現された同僚の日本軍人は男性的な特質が際立っている。それに対して、台湾側の女性は優しくて美しいという女性的な特徴が強調されている。

ただし、一言男性的だと言っても、軍隊における階層によってもそれぞれの特質は違ってくる。まず指摘できるのは、軍隊の下っ端にいる、事件に関わった兵士たちは、外地の生活に精神的な空虚を感じ、慰めを強く求めているように描かれている。異郷で横死した苫は、気が立ちやすく、助け合わなければならない軍隊の人々とよく対立し、「紅酒の匂いをプンプンさせて」（12 頁）アルコールに溺れ、酔っ払ってはよく私娼街へ出かけるといった風に、欲望に駆られやすい寂しがり屋である。また、「苫曹長が、いやがる葦田さんを抱きすくめて、むりやり口を吸ってる」（15 頁）と言われたように、女性に対して性的な嫌がらせをしたり、軽はずみな行動に走ったりする人でもある。さらに、「苫は常に狂暴な行為に用意された型の兵隊だ」（117 頁）というように、感情的で激しい行動に走るため、軍隊によって利用され、粗末に扱われた人でもある。

また、事件の現場で倒れた「中年の補助兵」（13 頁）の名倉は、相棒の根本が「もう何カ月も国から便りがありません。名倉の妻君は浮気者らしいんで、奴はヤケになってたんです。そこへ持って来

[19] 紙村徹は、日影の台湾ものの一連の作品における男女関係は「【駐留日本兵士：台湾社会】＝【男性：女性】」という図式で表現できると述べている。さらに、詳しく論証をしていないが、「『内部の真実』では、台湾社会側の登場人物は桃源街の地元有力者の娘である日本名を名のる葦田恒子やその義妹瑤琴に代表されるように女性ばかりで、葦田恒子の父親清太郎などまったく姿を現さないのに対して、他方日本軍側は小高軍曹や殺された苫曹長、調査官の大手大尉や勝永伍長に代表されるように男性ばかりだ。」と指摘している。紙村徹（2010、12）「日影丈吉の描いた台湾の「闇の奥」―日影丈吉はいかにして異郷台湾と出会ったのか―」161-162 頁。

て、葦田さんのやさしいいたわりが、奴の骨身に沁みたというわけですね。名倉はもう葦田さんに首ったけでしたからね」（15 頁）と語ったように、内地にいる妻に見捨てられ、孤独な人間である。そのため、苫に葦田家へ行ってはいけないと厳命されても、名倉は「葦田さんの女らしい親切さは、奴には唯一の慰安でした」（15 頁）と恒子に縋っている。

このように、日本内地から遥々植民地に派遣されてから、さらに総督府から離れた地方に駐在する、下級兵士である苫や名倉は支配者側に立ちながらも、権力とまったく無縁で、上官にいじめられ、抑圧される存在となっている。そのような状態に陥ったら、本来なら日本内地にいる家族を慰めにするはずだが、その家族にすら捨てられたため、彼らは外地で根無し草になってしまった。したがって、遣る瀬無い彼らは優しい台湾人の女性に慰めを求め、決闘までして、自分の命を捨てることさえできたのだ。ただし、その献身的な気持ちが燃えれば燃えるほど、彼らの寂しさの深いこと、外地での生活がいかに貧弱で空虚であるかが逆に手に取れるほど感じられる。

そして、兵士と対照的に、その長官たちは几帳面で威厳のある姿で描かれている。まず、本部から派遣されてきた、「ひらき襟の夏衣をきちんと着こんだ」（9 頁）大手大尉は、「この鑑識の大家として有名な上官には（中略）顔はこわいが、どぎついところのすこしもない人柄の人だった」（8 頁）と、親切な人でありながらも、軍人としての整然さ及び威厳を有している人物として描かれている。また、第二部の書き手である津路は、「軍医殿は応召の数年前まで十年近くも闘病生活を続けたという、見るからに弱々しい方だった。（中略）親切な医官であることに違いはないが、眼の前で病人を失望させるようなことも平気でいう人だった」（10 頁）という、長期に渡って病気と闘った意志の強い人でありながら、病人に対して冷酷に接している側面もある人である。

さらに、「几帳面なところのある曽根中尉は、何事も日課どおりに行われないと機嫌がわるい」（34 頁）と機械的に行動する生真面

臺灣人學學術期刊資料庫

目な側面を持ち、「憲兵隊に志願して入隊した人」である（16 頁）という、自ら特殊秘密の作戦に従事したいという逞しさをも見せている。同時に、時代遅れの拳銃を使用させられたことや「分遣隊の編成を見ると正規の憲兵隊とはいいかねる」ことに対して、「つい不満を洩らした」（16 頁）曽根中尉の遣る瀬無い気持ちとともに、そのきちんとした性格も示されている[20]。また、事件の調査を任された小高は下っ端ではないが、軍曹というやや下寄りの職位にいた。その小高の外見、同僚との人間関係などについては多く書かれていないが、その代わりに彼自身の内面世界が詳しく語られている。それについては次の部分で検討する。

2、安らぎを求める日本人男性

遣る瀬なさや寂しさに苛まれている日本人兵士は同時に、台湾に対する恋しさや慕う気持ちも持ちあわせている。それは前述した苫曹長や名倉補助兵のように、ややもすれば台湾の女性に対する情慾という形に流されてしまうのは想像に難くない。ただし、彼らとは異なり、「桃源街は新竹区の海岸線防備の拠点で、常にいくつかの部隊が駐留し、兵隊の数も多かったが、心からこの廟に親しんだのは、恐らく自分ぐらいのものだったかも知れぬ。」（39 頁）と述べているように、小高だけは駐在地の「桃源」、また現地の人々の生活や風習に対して心から愛情を持ち、真に台湾の生活を楽しんでいる。

「桃源」という町名に象徴されるように、小高にとってそこは心の自由をもたらしてくれる桃源郷のような場所である。これについては、まず小高の描写を見てみよう。名倉が殺人の自白をして事件が解決に向かっているように見えてから、「隊長のほっとしたらしい顔、根本のしたり顔、下士官や兵たちの物を疑うことを知らぬ無知な顔。みんなが簡単に名倉の犯行を認めて、安心してしまっている。そういう兵営内の空気にたまらなくなると、自分はいつものように

[20] 小高によると、「分遣隊は六個分隊に指揮班の首をすげた小隊編成で、各分隊は長として下士官一、補助憲兵若干で構成されていた」（28 頁）。

臺灣大學日語學術期刊資料庫

本島人の住む巷に逃れ出るのだった」（36 頁）と述べたように、小高は簡単に事件を終結させようとする同僚のいい加減さにあきれ、台湾人の住居地域をリトリートとして安らぎを求め、逃げ込む場所と考えたことが示されている。

しかし、深く愛情を持っているが、小高はその桃源郷の安らぎ、楽しみはいつか消え去るはかないものだとも見なしている。

> この無知な異民族の、雨を祈り風を祭る折目ただしい生活や、律義に炉の火を守るすがたは、われわれにとって鋭い批判でなければならなかった。が、われわれの生きる態度が、あるいは生かされる限度が、そんな見方を許さなかった。われわれはきわめて大ゲサに計算された、意味のない情熱に支配されていたのである。
>
> 自分はともすれば兵営を逃れ出て、苫や他の兵隊が休日の外出に、官能の渇をいやそうとするほどの熱心さで、かれらの生活のまぼろしを捕まえようとした。残念ながら、自分の追っていたのは、まぼろしでしかない。この骨にこたえる戦争が幻影でないかぎり、恒子さんや瑤琴さえ、まぼろしの人物に過ぎないではないか。
>
> しかし、まぼろしの風物に過ぎなかったかも知れないものが、自分にとっては至上のなぐさめであった（37 頁）。

ここで小高の気持ちを論じる前に、一言述べておきたいのは、作品中の殺人事件が起きたのとほぼ同じ時期に、日本政府によって植民地台湾に対して、強制的な日本化政策、つまり皇民化運動が行われていたことである。そのため、伝統や文化を台湾人の生活から排除し、国語としての日本語の普及、日本への忠誠及び国教としての神道への崇拝などを求め、名前を日本人風に改めさせ、神社への参拝などを強制した[21]。

[21] 黄昭堂（1981）『台湾総督府』を参考にした。

臺灣大學學術期刊資料庫

その台湾総督府によって実施された皇民化政策に相反する、台湾人が固く守ってきた伝統行事や行儀作法、またそれを重んじた生活を批判の標的にしなければならないと、小高は知っているにもかかわらず、それを批判したり、否定したりすることができなかった。それは、彼自身が支配者側に属しながらも、軍人として自主独立で自分の人生を営むことが許されず、生きていくには国家に堅く制限され、深く計算されていることを見抜いていたためだろう。そのため、台湾人が抑圧されておりながらも、自分のペースで生きようとする姿勢を心から羨ましく思っていると共に、台湾を安らぎの場所としたのではないかと思われる。

ただし、台湾人の生き生きとして安定した生活を羨みながらも、殺人事件が起きた 1944 年 5 月に太平洋戦争がすでに末期に入り、当時日本の陥った大変な情勢を理性的に判断した小高は、台湾人の平穏な生活もいつか砕けてしまうという危機感を持っていたのだろう。そのため、小高が繰り返し「戦時中のことで、街には人を楽しませるようなものは、何もなかった」（38 頁）、「同じく戦争中の乏しさであっても、まだしも台北などにくらべれば、この小さな田舎町は、新竹あたりから来た兵隊にも、ひどく退屈なところであったに違いない」（38 頁）、「廟のうしろには市場があって（中略）戦時中のせいか寂れていた」（43 頁）と述べているように、台湾人の生活はすでに戦争に影響され、乏しくなり、寂びれはじめた。さらに、戦争が続く限り、彼が好意を抱いた対象の恒子とその義妹の瑤琴の人生までも打ち壊され、ただの幻影となるしかないと彼は考えていた。

いずれ破壊されてしまうだろうが、小高にとって寂れはじめた田舎町はまだ大事な桃源郷として機能している。彼は「非情な軍紀兵規の世界を抜け出」して、「エキゾチックな環境で、日常の生活がつつましやかではあるが、執拗にくりかえされているすがたに、自分は心ひそかに、はかない喜びを感じていたのである」（38 頁）と、異国情緒が溢れて、慎み深い町の風景を楽しんでいる。また、「自

臺灣大學學術期刊資料庫

分は広場の片隅に立って、しばらく足をむけなかった気に入りの廟を見あげると、ややほっとした気持ちになれた。絢爛なゲテモノに過ぎないこの廟は、その代わり稚気や野趣に満ちていて、長いあいだの軍隊生活にこちこちに硬ばった心へ、湯をさすように弛めてくれるものがあった」（38 頁）と述べたり、「桃源街（中略）こういう大小の廟や正庁の祭神を中心とする本島人の信仰の、ファンタスチックな点に興味を持っていた」（39 頁）と語ったりしている。

このように、台湾人の居住地域、及びその風習を具現する廟宇を素朴な味わいを持って稚気に満ちたものだと理性的に評しているにもかかわらず、軍隊での酷い生活、気の合わない同僚との厳しい人間関係から逃げ出そうとする際に、エキゾチックな雰囲気のある桃源地域やファンタジー感のある廟宇は、小高にとって安らぎを感じさせられたり、気分転換させてくれたりする場所であった。さらに、苦痛から救い出してくれる存在にさえなっていた。このように、桃源の事物を愛しく思う小高にとっては、台湾はすでに日本人の権力の下に置かれて統括される植民地という政治的なレベルを超えて、人生の掛け替えのない存在となっていたのだろう。そのためか、彼は命をかけて台湾人女性の恒子を守ることを果敢に貫徹した。これについては、次の部分で論じていきたい。

3、台湾女性に対する恋慕

前述したように、小高の台湾社会に対する愛着は、さらに進んで恒子及びその義妹の瑤琴に対する愛情に繋がっていく。「はじめて恒子さんに会った時、桃源に来て以来、ひどく気に入ってしまったこの街に対する、自分の愛着の最後のものは、この少女であると思った」（59 頁）と述べたように、彼が桃源という町から感じ取った親しみや愛おしさは次第に彼女への愛情へと変化していったのである。

ただし、指摘しておかなければならないのは、小高が桃源の素朴で「台湾的」なところに惹かれているにもかかわらず、恒子に魅せ

臺灣大學學術期刊資料庫

られたのは、彼女の台湾人らしくないところにあるということである。長い引用になるが、次のような記述がある。

> 恒子さんの顔は、どちらかといえば癖のある顔だった。美人の産地として有名なこの地方の、お人形のような女たちからみれば、むしろ異端的な美しさだった。（中略）小柄な体格や皮膚の冷たそうな心もち青い顔には、十分な成熟を示しながらも、少女の神聖な情感（エロチシズム）のただよう不思議な魅力を感じられた。
>
> 自分は特に彼女の本島人臭のない、近代的な特異な顔だちに魅力を感じた。（中略）自分にとっては国籍などないフェアリ・ランドの女たちだったのである。
>
> 自分が少年の頃、はじめて淡いあこがれを抱いたことのある一少女の顔。その少女が夭折した後は、西洋画の複製の中にしか見出せなかった、そして、死や懸額の板ガラスのかなたに、自分がそっとしまっておいた面影を、恒子さんに見出したのだった。あるいは、この土地で見る一切の物を美化しようとした自分の心の動きが、そして抑圧された脆弱な生への限りない愛着が、彼女を自分なりに美化させていたのかも知れぬ。（60-61頁）

現実では台湾の桃園は美人が多いと言われていたが、恒子の美貌はそこの女性の美しさとは違うものに描かれている。小高は恒子が周りの「お人形のよう」な紋切り型の美人とは違って「異端的な美しさ」のある美人だと述べている。それはどんな美しさを指しているのかというと、成熟さだけではなく、現実に穢されずに少女の清らかさを持ち合わせるものである。特に台湾人らしくなく、西洋の聖女や天使のような神聖さを持ちながら、近代的な雰囲気もあって、さらに「国籍などないフェアリ・ランドの女たち」という言葉に示されているように、国籍を超えたおとぎの国の女性のような美しさは、小高に見苦しい現実を忘れさせ、桃源郷にいることを連想させていたのだろう。

臺灣大學學術期刊資料庫

また、恒子の美しさは少年時代に憧れた対象の面影に通じていることで、小高により高く評価されている。言い換えれば、小高は恒子に過去の現実に圧迫されなかった、過去の純粋な自分を見出していると言えよう。そして、植民地支配に抑圧された台湾、その土地に対する憐れむ気持ちもさらに彼女に投射され、その美しさを脆く崩れやすいものだと小高は考えるようになった。ここでは、小高にとって恒子は台湾という枠を超えた存在であり、同時に台湾に包括され、台湾を代表している女性でもある。

このような自分の日本内地にあった思い出と関連してできた恒子への好意、また被支配者の弱い立場に置かれた恒子のことを思い及んだ結果、小高の思いは進んで「『恒子さん、ぼくといっしょに内地へ行ってみる気はない？』その時は照れくさいので冗談めかしていったのだが、自分はこのような平和なエキゾチックな家庭を姻戚に持つのも悪くないと、真面目に勝手な空想をめぐらしていた」（62頁）というところにまで発展していった。

ここに、葦田家の持つ異国情緒を楽しみ、一生付き合ってもいいと思いながらも、台湾に永住する意思はないという小高の考えが示されている。そこには恒子を彼女にそぐわない台湾から連れ出し、内地へ連れて帰って彼女をより近代的で日本的にする考えもあるだろうが、戦争によって破壊されていく台湾から恒子を救い出して守ろうとする意図がより強かったのではないかと思われる。

そして、恒子への愛情が強いものであるため、彼女をかばい守る気持ちも事件の発展とともに次第に高まっていった。「今度の事件から、恒子さんの立場を保護しなければならぬと、自分は心に決めていた」（52頁）と小高は密かに決意をした。その後、恒子が拘束されて、小高が「はらわたを掻きむしられるような焦慮にさいなまれた」（58頁）と耐えきれないほどの焦りを語ったり、「恒子さんの面影は胸を去らず、自分は絶望感にとらえられて、ときどき目まいを感じた」（59頁）という希望を持たなくなった気持ちを示したり、また「声のない断末魔の叫びをあげて、彼女は無限の暗い青み

臺灣大學學術期刊資料庫

の中に堕ちて行こうとする。ああ、恒子、自分は必ずきみを救う！」（88 頁）と危機感に迫った心境を述べたりしている。いずれの叙述も、恒子を守りたい一心が昂じて激しく緊迫感に責められ、理性的に思考できなくなった、小高の深い愛情が描かれている。その深い愛情のため、小高は真犯人を探り出したにも関わらず、自分がその代わりに容疑者として拘束され、被爆し亡くなってしまった。

以上述べてきたように、作品の中で描かれた日本人は、全員台湾に派遣されてきた軍人で、男性のみである。彼らは、植民地の支配者側に属して、権力を持っていると思われているが、軍人として国家に日常生活を制限されながら、異郷で寂しさや虚しさを味わって生きていくことをも強要されている。これに対して、作品の中で台湾の女性はどのように描かれているか、次の部分で論じてみたい。

（二）女性としての台湾：

1、言葉のない台湾人男性

憲兵隊という男性のみの集団で表現される日本人と対照的に、『内部の真実』における台湾は女性として描かれている。これについては二つの方向から考えることができる。まず、作品中に出た数少ない台湾人の男性は誰でも、自ら発言したことがなく、存在感のない人間として描かれている。それに対して、台湾人の女性は自分の意志で行動したり、日本人と交流したりするように描かれている。まずは、葦田家の男性たちから見てみよう。

葦田家には恒子のほか、その父母、祖父母、及び独身の叔父が一人いる。また、現在は一緒に暮らしていない養女の瑤琴がいる。その祖父母と母親、叔父に関しては、存在だけには触れたが、詳しいことは一切語っていない。そして、家長である父親については、直接にその外見や性格に触れることがなく、小高が現場検証に行った際に、その家の中の様子を描写したことで表現されているだけである。

小高は当時の台湾人の家は家の祭神や先祖の神主などを取り払って、「ある時期に強制されたのだろうが、天照皇大神や神武聖帝な

臺灣大學圖書館期刊資料庫

どと大書印刷した粗末な掛軸を、その上の壁に吊るした民家もあった」（22 頁）と予め断っている[22]。それに対して、「この家では、さすがにそんな殺風景なことはしなかった。葦田さんの当主がまだ日本風に改姓名しないで、陳姓を名乗っていた少年の頃に、本島の智識階級を風靡した老荘思想の名残が、ここにあった。（中略）壁にかけめぐらした丹条聯の達筆な書幅や、四君子や芦雁の図などをながめていると、古い中国の影の中に坐っているように奥床しかった」（22 頁）と述べている。この描写から、若き時代に老荘の隠遁的で超俗的な思想に傾倒し、風格があり気品に満ちた芸術品を好んだ葦田家の主人の文人的な一面が窺われる。また、台湾総督府によって展開された皇民化運動の一環としての「正庁改善」運動に屈して天照大神などの掛け軸をかけることをせず、先祖を大事に祭る側面も見せている。

一方、総督府が皇民化運動の一環として台湾人に対して日本式の姓名に改めさせる方針に従って、陳という苗字を日本名の葦田清太郎に変えたという、日和見主義者の側面も覗かせている。それはさらに、小高が「この一家は、われわれ兵隊にこころよく門戸を開放してくれた」（59 頁）と述べたように、桃源に駐在する憲兵隊の日本人兵士がこの家へ自由に遊びに来るのを歓迎していることにも繋がっている。

また、未婚の娘をできるだけ外出させないという有産階級にありがちな発想でなく、娘の恒子が「街の衛生委員をしていて、公学校の医務にも関係があった（中略）部隊にも出入りして」（59 頁）いることを許したり、寛大に恒子と瑤琴が兵士たちを歓待するのを認めたりするように、豪快で温かい性格と共に、支配者の機嫌を取るという政治的な手腕のある一面も覗かせている。決して多いとは言えないこれらの表現を通して、葦田家の主人の人柄が巧みに描かれ

[22] 明言されていないが、ここでは台湾総督府が 1936 年 9 月から実施しはじめた皇民化運動を指している。それは時間的にも作品の中の年代、また作者日影が実際に台湾に滞在した時間と一致している。

臺灣人日本語文學資料庫

ている。ただし、葦田清太郎が自ら言葉を用いて、何かについて語ったことは一度もない。彼は日本人男性である小高の目を通して表現されているだけである。

葦田清太郎以外に、もう一人の台湾人男性、金天騏が事件の参考人として言及されている。しかし、彼が自ら何かを語ったことは一度もなく、瑤琴及び勝永伍長の言葉でその存在が語られている。例えば、瑤琴は事件の起きた晩、帰り道にちょうど銃声を聞いた際、「むこうから来る人に(今晩は)と声をかけられたのですわ。声で、金さんだとすぐわかりました。」(25 頁)と、二人で鉄砲の音を聞いたことを尋問された際に説明している。ここでは、金天騏は瑤琴のアリバイを裏付けるための存在である。その後、勝永伍長が「金天騏は職業がら、時間にはいつも気をつけています」(33 頁)と発砲の時間を確認していた。これらの表現を通して、金天騏の人柄よりも、彼の職業によって培われた時間感覚のみが重んじられていることがわかる。ここでも、一人の存在感のない台湾人男性として描かれている。

さらに、もう一人の台湾人男性がいる。それは、小高が愛着を持ってよく行っている廟の管理人、「張」という名字の司公(サイコン)である[23]。台湾の風習に興味を持ち、より理解を深めようとして、小高は張との交流を図っていた。「ところが(中略)この男は、まだ四十に間のある年恰好だったが、期待に反してまるで日本語が喋らなかった。(中略)何をきいても、いっこう要領をえなかった」(39 頁)とあるように、張の年齢から言うと、当時盛んに行われていた皇民化運動に巻き込まれて名字を変えさせられたり、片言でも日本語を喋らせられたりするのも不思議ではない。しかし、まるで排除されたかのように、台湾にいる日本人、そして日本語とは全く無縁な存在となっている。

[23] 「司公」というのは、道教の教団に属し、道観や廟に居住する人であり、道士とも呼ばれている。

臺灣大學學術期刊資料庫

ただし、日本人とは交渉がないが、彼は地元の台湾人の間で影響力を持っていることを、小高が「その後、自分はふとした機会から、かれとときどき顔を合わすようになり、またこの男が附近の住民の生活に、ある程度の権威をもっていることもわかった」と、観察していた。ただし、言うまでもなく張の権威は台湾人の間に限られ、支配者側の日本人に通じるはずがなかった。さらに、皇民化運動が進んでいくにつれて、台湾人には定期的に神社を参拝することが強要されるようになり、彼が管理する廟もいつしか総督府が推進した「寺廟整理」の運動によって抑圧され、荒廃していく運命にあった。従って、張司公が日本人と意思を疎通したりすることはますます不可能となり、時代に隠されてしまう存在となったのだろうと思われる。

2、台湾を代表する女性

声がなく、存在感のない台湾人男性とは対照的に、台湾人の女性は自ら意見を述べたり、自分の意志で行動したりするように描かれている。中でも、兵士たちの憧れる対象である葦田恒子は最も代表的な一人である。彼女についての描写はその性格及び教養の二つの側面から行われている。まずはその性格について見ていこう。資産家の娘としてお嬢様育ちではあるが、恒子は世間のきまりやしきたりにとらわれる、弱々しい女性では決してない。むしろ、豊かな感情を持ち、弱いものを守ろうとする正義感の強い、生き生きとした女性として描かれている。

例えば、容疑者と疑われた際、恒子は「感情の激発を圧えきれぬふるえが華奢な全身を走ると、わっと声をあげて泣き伏してしまった」（53 頁）ように、激しい感情をあらわに出している。また、小高に一緒に内地へ行こうと誘われた際には、はにかんで何も答えずに「つやを含んだ眼が、唇をつりあげた笑顔のかげで妙に光っていた」（62 頁）恒子だが、その恋心は決して中途半端なものではない。「帝国軍人を殺害した本島人少女の運命は、わかりきっている」（77 頁）と周りの人々の心配を振り切って、自ら殺人を白状したり、容

臺灣大學學術期刊資料庫

疑者として拘束された小高を守ろうとして、「恒子がまだ、つかまっていてあげればよかった」（142 頁）と自ら憲兵隊の長官に訴えたりした。

そして、小高が拘束中に被爆して亡くなったのを知らずに、一年半が経っても、恒子は相変らず「いまでも毎日、観音媽にこの花をささげて､早く小高さんの無罪の明しが立つようにお祈りしている」（193 頁）ように、一途に小高の帰りを待っている。このように、恒子は世間にありふれたお嬢様のように気持ちを抑えて上品に振舞うのではなく、豊かな感情を自然に表し、自分の気持ちを正直に出している。

それと共に、正義感の強いことも恒子の特徴の一つである。それは､常に下っ端の兵士である名倉をかばっていることだけではなく、また自ら「わたくし、ふだんから金すじの人が兵隊さんをいじめるのが、いやでなりません。」（23 頁）と言っていたように、彼女は立場の弱い者をいたわり、相手が支配者であれ、士官であれ、権勢のある人に対しても、勇気を持って批判したり反抗したりする女性でもある。

このような恒子は、日本的な教養が深く備わってもいる。日本人の名前が付けられたことや、流暢な日本語で日本人とコミュニケーションをしたことだけが、それを意味しているのではない。彼女は日本語によって知識や文化を多く蓄えている。それは、彼女が日本語でジードの『背徳者』（81 頁）やスタンダールの『赤と黒』（82 頁）などのフランス作家の名著を読み漁り、「窓の下に据えた帖案には、日本語の書籍がたくさん積んであ」る「なかなか読書家」（81 頁）と言われているように、彼女の日本語理解力は相当なレベルに達していることや、日本人のように日本語の書物を通して世界を認識し、理解していることでも表現されている。ある意味で、彼女の読書は日本的な思想を身に付ける過程でもあると言えよう。

そして、恒子の他にもう一人の台湾人女性が存在している。それは、小高が「媳婦仔（ㄙㄧˊ ㄈㄨˋ ㄗˇ）という、養女のようなもの」（96 頁）と紹介し

臺灣人學學術期刊資料庫

た江瑤琴のことである[24]。貧しい家の出身で、幼い時から葦田家によって育てられていた。そして、彼女は大人になって自分の家に帰ってからも、葦田家と親しく付き合い、恒子が拘束されたことを「心配して、生きた空もない」（80 頁）状態になるほど、恒子と本当の姉妹のように仲良くしていた、情け深い人である。

本当の娘ではないためか、彼女は名前を日本風にせず、「江瑤琴」という台湾式のままにしている。また、「瑤琴の日本語は、恒子さんに較べれば、ややたどたどしい」（24 頁）と言われたように、日本語を習得し、それを通して知識や教養を身に付けることもなく、純粋な台湾教育を受けて、伝統的な台湾人として育ったのである。

その瑤琴は「青葡萄の実を思わせる娘」（24 頁）で「無邪気に眼を輝かせ」（25 頁）る、と述べられたように若くて未熟な女性ではあるが、「誰もが眼をみはったほど美しく見えた」（103 頁）ほどの美しい女性でもある。しかし、多くの日本人兵士に慕われた恒子とは対照的に、美しい外見を持っていながらも、瑤琴は日本兵士には全くモテなかった。むしろ、無視され、避けられる存在にさえなっていたと言えよう。

貧しい実家の母親の長患いのせいで、瑤琴は思い詰めて私娼街で最初の客である小高と関係を結んだ。しかし、小高は「女の印象は郷愁のように胸に残った」（100 頁）にもかかわらず、「その女のことを忘れようと決心した。そして、雨の夜に自分の感じた興奮は、錯覚にすぎないと思った。何か夢と現実というような思考の立ち入れない深いずれで、もうその女とは隔てられてしまったのだと考え

[24] 日影は、小高の言葉を通して「媳婦仔という、養女のようなものかと気がついた。台湾には昔から螟蛉子などといって、養子の習俗がある」と台湾の風習を紹介している。「媳婦仔」というのは、幼い女児を家に迎えて大きく育ててから、自分の息子と結婚させるという台湾人の古い風習の一つである。従って、葦田家に瑤琴が幼い時から結婚の約束をする男性がいるはずだが、その男性については一切触れていない。また葦田家のことを「養家」（103 頁）と示したり、「恒子さんが美しい妹をほこるように微笑を浮かべて、（中略）江氏瑤琴の名を自分たちに紹介した」（103 頁）と表現したりしたことから見れば、瑤琴は「媳婦仔」ではなく、養女であることが推測される。おそらく、日影が読者に異国趣味を感じさせるため、はっきりとした意味が分からないまま、この言葉を使ったのではないかと思われる。

た」（101 頁）と述べ、瑤琴のことを「郷愁」で例えたように、気になってひかれてはいるが、両者の間にあまりにも大きな相違が横たわっているためか、それを一つの非現実的な経験と割り切っている。

後に、瑤琴にその晩限りでもう体を売る気にならないと告げられたが、小高はその言葉を聞いても「自分は感動しながらも、まだ半信半疑だった」（103 頁）と、彼女を受け入れようとしなかった。このように、恒子を守ろうとして自分の命を失っても構わない小高は、瑤琴と関係を持ち、心の動揺を感じたにも関わらず、彼女を対等に付き合う対象と見なしていなかった。それは、小高の恒子に対する一途な愛情に影響された結果とも言えるが、また、支配側の日本人男性と、支配を受けながらも一向日本的にならない台湾人女性との間には、ある越え難い距離が横たわっていたとも言えよう。

以上のように、日本人兵士にもてるかどうかは別にして、恒子も瑤琴も自ら発声したり、自分の意思で行動したりできる存在と描かれている。ただし、恒子は、小高に少年時代の片思いの相手を思い出させたほど、日本人女性を彷彿とさせる外見をしている。また、日本語を流暢に操り、日本語の書物を読み漁り、内面的にも日本人化しつつあった。そのような恒子は多くの日本人男性に慕われ、命をかけても守ろうとする存在であった。一方、瑤琴は、たどたどしい日本語を使い、日本人とコミュニケーションもうまく取れない、恒子とは対照的に甚だしく伝統的な台湾人であった。そして、小高と深い交渉を持ったにもかかわらず、一時の快楽の対象としか見なされておらず、陽の当たらない哀れな女性として描かれている。したがって、軍隊での階層によって区別される日本人男性とは違って、台湾人女性はその日本化の程度によって重んじられたり、重んじられなかったりしている。

四、終わりに

日影丈吉は、終戦直前の僅か二年弱の時間を台湾で過ごした。後に、彼が 1975 年に発表した「玉蘭傷心」というエッセイで「戦争が

臺灣大學學術期刊資料庫

終って台湾から引揚げて来た頃、彼地のことがしきりに悩ましく胸に浮かんだ。特にある白い花の咲く庭樹の思い出が、その下の正庁で食卓を囲み、語り合った人たちの姿と共に忘れなかった。玉蘭という花の名は、その家のお嬢さんから教わったのだ。」[25]と書いた情景と類似して、『内部の真実』の中でも小高は恒子に玉蘭の花の名前を教わったのである。また、主人公の「小高という名前からして日影の本名片岡をもじった可能性があるのではなかろうか。」[26]と言われるほど、台湾を舞台にした最初の作品『内部の真実』は、彼の個人的な要素が強く含まれた作品として仕上がっている。

そして、生涯を通して思って止まなかった台湾について表現する際に、彼自身の軍人としての台湾体験を重ね合わせるかのように、統治者である日本を男性として書き記し、また、植民地である台湾を女性として描いた傾向が強くあると指摘できる。ただし、男性としての日本は、自ら志望した職務に失望させられたり、上官に威圧されたり、内地の家族に見捨てられたり、郷愁を感じて外地で根無し草になったりして、国によって与えられた位置や場所に安らぎや幸せを感じられない男性として表現されている。さらに、その男性たちは植民地での生活に空虚感を感じたり、その反動で台湾の物事に慰めを求めたり、自分の意思で命さえなくしてしまったりしている。

さらに、台湾を表す女性は、それぞれの日本化の程度によって違う運命を辿っている。外面的にも、また内面的にも日本化の程度が進んだ恒子は豊かな感情や内面世界をあらわに表現することができる。そのうえ、日本人男性ばかりの集団にも形式的に、また感情的にも自由に出入りすることが許されている。彼女は植民地台湾の明るい側面を代表する人物のように思われるが、日本的な特質を持ち合わせているため、言い換えれば、日本人の支配者に統治され、変形された台湾の一側面を表わす存在でもある。

[25] 日影丈吉『日影丈吉全集・別巻』の「月報」9、国書刊行会、2005 年、673 頁。
[26] 日影丈吉『日影丈吉全集』第 1 集の「月報」1、国書刊行会、2002 年、613 頁。

臺灣大學日文學術期刊資料庫

その恒子と対照的に、瑤琴は母親のために身を尽くし、義理の姉の恒子を支え、一度交渉を持った小高に一途に心を傾けている、伝統的な台湾人の気質を色濃く持っている。伝統的な台湾人の女性を代表する瑤琴は、植民地にいる日本人男性にほとんど重視されず、台湾の陽の当たらない側面を代表する人物として描かれている。タイプは違っているが、作品中の台湾人女性として、恒子にしても、瑤琴にしても勇気のある行動をとる気丈な女性だといえよう。

このように、日影は生涯思い続けた台湾を女性として描いているが、それは決して弱々しく、自主的に行動が取れないものとして描いてはいない。むしろ、内面的に豊かで、いくつもの側面を持つ生き生きとした女性として表現している。また、それと対照的に、植民地にいる日本人は男性のみで表現されており、異郷で寂しさや虚しさを味わい、歪んだ形で愛を勝ち取ろうとする人もいれば、自分の命をかけて愛する台湾人女性を守り貫いた人もいると描いている。

戦争末期の台湾で様々なことを体験し、諸々の現実について思索させられた日影にとって、台湾は生涯にわたって忘れることのできない、濃密でこまやかで、そして込み入っていて、簡単に語ることのできないものであった。そのため、『内部の真実』という、複雑な心理が入り組んで、事件が錯綜した小説の創作を通して、彼の抱いた台湾への思いを表現しようとしたのではないかと思われる。さらに、支配者側を男性で、被支配者側を女性という帝国主義の屈折した表現ではあるが、謎を解いていく過程において、相手をかばういたわりや思いやり、また相手に尽くそうとする愛情こそ、支配者の日本人男性と被支配者の台湾人女性を繋いでいるものだと解明していった。これこそ、日影の台湾体験の最も大きな特徴の一つであり、またほかの日本人作家の描いた植民地時代の台湾経験と最も大きな違いでもあると言えよう。

臺灣大學學術期刊資料庫

【テキスト】

日影丈吉（1978）『内部の真実』社会思想社

【参考文献】

日影丈吉（1975）『華麗島志奇』序文、牧神社
黄昭堂（1981）『台湾総督府』教育社
川村湊（1989）「華麗島という鏡—日本近代文学と台湾」『アジアという鏡　極東の近代』思潮社
池田浩士（1997）『［海外進出文学］論・序説』インパクト出版会
川村湊（2001）『日本の異端文学』集英社
日影丈吉（2002）『日影丈吉全集』第 1 集「月報」1、国書刊行会
垂水千恵（2002）「日影丈吉の台湾」『日影丈吉全集』「月報」2、国書刊行会
横山茂雄（2002）「解説」『日影丈吉全集』第 1 集「月報」1、国書刊行会
横山茂雄（2002）「桃源への旅—日影丈吉と台湾」『幻想文学』第 65 号、幻想文学出版局
日影丈吉（2005）『日影丈吉全集・別巻』「月報」9、国書刊行会
姚巧梅（2005）「「日影丈吉と台湾」ノート」『曙光』第 2 巻第 3 号、日中文化研究会
姚巧梅（2006）「日影丈吉の「崩壊」、「眠床鬼」と台湾」『日本比較文学会東京支部研究報告』第 3 号、日本比較文学会東京支部
姚巧梅（2006）「眠床というメタファー——日影丈吉の「眠床鬼」を中心に」『曙光』第 2 巻第 4 号、日中文化研究会
姚巧梅（2007）「日影丈吉の「眠床鬼」と台湾」『解釈』第 53 巻第 1 号、解釈学会
紙村徹（2009）「台南蘭砦址にまつわる対談における位相の差異—佐藤春夫と日影丈吉の見た台湾の闇—」『天理臺灣學報』第 18 号、天理台湾学会
紙村徹（2010）「日影丈吉の描いた台湾の「闇の奥」—日影丈吉は

臺灣人學學術期刊資料庫

いかにして異郷台湾と出会ったのか―」『南方文化』第 37 号、天理南方文化研究会
川村湊（2012）「解説　滄海に滅ぶ―台湾・南方の戦い」『コレクション戦争と文学 18 帝国日本と台湾・南方』集英社
「http://www.kokusho.co.jp/np/result.html?ser_id=104」国書刊行会
「http://www.kokusho.co.jp/np/isbn/9784336044112/」国書刊行会

臺灣大學學術期刊資料庫